

## シンポジウム 生活体験学習を拓（ひら）く：理論 と実践をむすんで

桑原， 広治  
熊本県水俣市立久木野小学校

<https://doi.org/10.15017/9011>

---

出版情報：生活体験学習研究. 1, pp.101-122, 2001-01-01. 日本生活体験学習学会  
バージョン：  
権利関係：

## シンポジウム 生活体験学習を拓（ひら）く

—理論と実践をむすんで—

とき；1999年9月12日

あいさつ；朝原良行

問題提起；横山正幸

コーディネータ；南里悦史

シンポジスト；正平辰男

森山沾一

猪山勝利

古賀倫嗣

<朝原>

みなさん、おはようございます。昨日からご参加いただいた方々、たいへんおつかれのところに、今日2日目をむかえて、あえて申し上げるまでもなく今の子どもたちの教育問題については精力的に色々論議がございまして。そういった中でいわゆる生活体験というものを通じてもっと子どもたちをより健やかにという願いが各地で広まってまいっております。そうした時期に早くから取り組んできました、本町をはじめ、それぞれ全国的には取り組みが行われつつございます。そうしたものをより深く進めていくために、二日間に渡って研究大会を催すことになりました。いろんな立場から昨日もそれぞれの地域から実状等を報告いただいて論議が戦わされてまいりました。今日はシンポジウムということでそれぞれの先生方をおいでいただきました。非常に短い時間ですが十分な成果をあげることができれば願っております。どうぞ、ひとつよろしく願い申し上げてごあいさつにかえさせていただきます。

<横山>

なぜ、今、こうしたテーマで会を開いたかということですが、子どもたちは多くの可能性を持って生まれてきます。これは、ロマンチックに申し上げるのではなく、事実として、そうだと申し上げてよろしいと思うんですね。ところが、残念ながら、今子どもた

ちに、いろんな深刻な状態が起こってきております。例えば、私の手元にこういった資料がございます。1983年に私の研究室で小学校6年生を対象にある意識調査をやりました。「特に病気というわけじゃないのに、学校にいきたくないという気持ちになることがある」という子が、26.1%いました。1983年です。それが、1991年に宗像市のほうで1,014人を調べた結果ですが、56.1%に上がっております。そして、1998年に同じ調査を実施しました。なんと、79.0%です。この子どもたちがみんな不登校になるというわけではありません。しかし、本当はいっぱい可能性を持っている子どもたちがいかに深刻になってきているかということがわかりいただけるのではないかと思います。

では、なぜ、このようになってきているのでしょうか。背景には、やはり体験の欠損ということがあるだろうと思うんですね。そういった状況の中でこの庄内町では、かなり前から生活体験学校を設置して、取り組みが行われてきました。当初は目立たない存在でしたが、今では国レベルで21世紀に向けて子どもたちを健やかに育てて行くには、体験が不可欠だということが、常識になりつつあります。そうしたなかで、全国あちこちで庄内町が進めてきた通学合宿が色々な形で、展開されてきました。しかし、どういう体験をどのような形で進めていくのかという点になると、それぞれ一生懸命、地域・地域で頑張っているのですが、理論的な根拠や具体的な方法が必ずしも明確ではありません。

そういうなかで、私たちは、子どもたちの健全な発達を願うという立場から、日本各地におられ研究者や実践家が、お互い手をつなぎ情報を交換し、子どもたちがいい形で体験できるようにしていくことが大切ではないかということで昨年、それぞれ学問領域も違うわけですが、「会を、とにかく、作ろう」ということになりました。そして、庄内町を発信基地として、みんなで生活体験を考えていく場を作ろうじゃないかということで昨年3月に学会を立ち上げることを計画したわけです。ただし、学会ということになりますと、どうも堅いといえますか、学者達が勝手なことを言うばかりで、現実には、つながらない場合も少なくありません。それではいけないので、この会は実践ということを重視しようということで、学会立ち上げの前段と

して実践交流会が、昨日今日と開かれたわけです。

で、これからこのシンポジウムでは、いろいろ、体験について論議がおこなわれると思うのですが、体験といっても、「させられ体験」ではいけないのです。もちろん、それも必要な部分があります。しかし、従来の体験活動をみても、大人がプログラムし、子どもがお客様になってしている場合がいっぱいあります。それだけでは、いけない。どういう体験がいいのか、あるいは、どんな方法で進めるのがいいのか、こういったことをきちっと理論的におさえて、実践のみなさんと手を携えてやっていくことがこれからは必要だと思っています。そのためには、どういう課題があるのでしょうか。学校はどうあったらいいのでしょうか。家庭は何をしたらよいのでしょうか。わずか2時間程度しかありませんが、こういったことについてそれぞれの立場からご意見を出していただいて、討議し、考えていこうというのが今日のシンポジウムの主旨です。答えが一回で出るわけではありません。しかし、いろんな話題がでるでしょうから、それは出発点と位置付けてお互い頑張っていくことができればよいのではないかと、思います。

コメンテーターということで、本来なら、最後にコメントするのが役割なのですが、司会の南里先生の方から最初にちょっと話してほしいということでしたので、私の思うところを述べさせていただきます。みなさん、どうぞ、よろしくお願いいたします。

<南里>

どうもありがとうございました。では、最初のセッションに入っていきたいと思いますが、それぞれの分科会の要点報告、分科会での討議の中身とそれぞれの論点をそれぞれ10分以内に説明していただきたいと思っています。では、第一分科会正平さんから。

<正平>

第一分科会の司会をしました、正平です。私の分科会は、通学合宿というテーマになってましたので、実際にやっておられる方、或いは、今からもうすぐやるよという方ばかりが、ほとんどお集まりでございました。分科会の雰囲気一言でいいますと、宮城県からははるばるおこしくださった高橋さんがおっしゃった

んですけれども「長いこと教員やってとって、いろんな研修会にも数え切れんくらいあったけれども、半分くらいは寝とったかな。でも今日の分科会は4時間もぶっとおしやったらけれども、今日は勉強になった」とおっしゃっておられました。その方に、象徴されますように、やっぱり今までやってこられた、或いは、今からやろうとしておられることについて、「たくさんのことを吸収して帰りたい」と、そういうお気持ちが流れておりました分科会でしたので、司会としてもたいへんやりやすうございました。

この分科会で報告されましたのは、ご案内のように、4つの事例でございまして、最初は、瀬高町の清山学寮という名前の。これは、7つの小学校をいっぺんに、参加者を募集して自分が行っている学校ではない、短期留学という言葉を使っておられましたけれども、自分が行っていない学校に通学するというプログラムですから。これは、私の知る限りでは、全国で瀬高町だけ。ちょっと考えたみただけでも、机の数の調整から給食の調整。一番難しいのは、学校で授業があっているのに、進み具合が学校ごとに全部違うわけですから。それも7つの学校からいっぺんに集めて自分が行っていない学校に行かせるといったら、これは、学校としてはたいへんな努力がいるわけですよ。とてもじゃないけど、瀬高町じゃなきゃできない。どこに行っても紹介しますが、ほんとに、学校が本気になってこの社会教育とももちろん、4つとも共通して学校と連携しなければいけない事業なんですけれども、とりわけ、学校が本腰いれてやらないと、こういうプログラムはできないだろうなというのが、その瀬高町の事例です。

その次の三池郡高田町にある江浦小学校。これがまた、確か始まったのが平成9年度でしたかね。お手元の資料、後で見ただければわかりますが、平成10年度の資料が入れてありますけど、自治公民館等の十ヶ所で通学合宿をやる、それも一泊から6泊7日まで、地域の小さい公民館でやるわけですから、当然のこと風呂はない。風呂に入る時間を決めてうちに帰って風呂がすんでまた集まってそこで合宿をする。地域にある小さい公民館を使って通学合宿をするという、これもまた、全国に江浦小学校だけでしょう。しかも、学校が音頭を取って、地域に呼びかける、そして、実動してるのは、親と地域の小さい公民館でがんばって

いるわけなんですね。こういう取り組みってのはこれまたその、江浦小学校にしかモデルはないというやりかたですね。

そして、岡山県の加茂川町の取り組みってのは、これも、それこそ、崖を後ろ飛びに飛ぶような気持ちで、このO-157が大流行した平成8年度にみんな手を挙げずに逃げ腰になるところを、手を挙げてやって下さって、三つの施設で施設が違うわけですから、その条件が全く違うわけです。同じ町のなかで、3個所でそれぞれで通学合宿をやってらっしゃる。これも、福岡県内には、色んな通学合宿、平成10年度の事例でもうしますと30事例ございます。ございますが、一つの町で、三つの施設で違ったスタイルの通学合宿をやってるというのは、福岡県内にもございません。これはなかなか、発表された岸本係長が「初めてやるときは、やりそこのうたら、やめてもいい。辞表を懐に入れてでも」というそれくらいの意気込みでお始めになったわけですね。それは、岡山県では数少ない動き、福岡と比べれば事例は少ない訳ですからひとつの町でこれだけ気合を入れてやってるところは福岡県内にもございません。

そして、4つめはご存知の庄内町の通学合宿ですが。これはまあ、専用施設を作って年間に20回の通学合宿をやり続けるっていうわけですから、これまた全国にはどこにもない。いわゆる元祖通学合宿は庄内町。それぐらいに4つの事例をご紹介しました。

もう、時間がございませんが、それなりにご苦労があるわけで、それなりに特徴があるわけです。しかし、連携の差、密度の違いはありますが、通学合宿というプログラムは程度の差こそあれ、学校と地域社会、或いは、家庭、社会教育が共通理解・相互理解をしなければ、成り立たない事業なんですね。それが、ベースです。強いていえば、瀬高町と江之浦小学校の通学合宿は学校側が大汗かいて頑張ってる姿が良くわかる取り組みです。それから岡山県の加茂川町と庄内町の取り組みは、どちらかといえば、社会教育が大汗かいて頑張ってる姿がよくわかるプログラムでおわかりのように、この4つのモデルを見て考えられることはそれぞれの町や村で自分のところでやれるやりかた、全部違うのが当たり前なんです。よそと同じ事をする必要は全くないし、自分の地域町村で考えたやり方でやって

いく。ということが、基本になってる。おそらく、来年もこの実践交流会でまた違ったですね、通学合宿をお聞きいただけると思います。そうすると8通りのスタイルをご紹介することになるんですが。これまた、全く違うやり方になってるだろうと思います。

やっぱり、心配なのは徳島からおこしの森さんがおっしゃられたんですが、「子どもの育ちの現状を見てみてやっぱり心配なことがたくさんある。これじゃあ、いけないと私は思うんだけど、通学合宿をやってるみなさんも同じように思ってるんじゃないか」ということが原点にあって、やっぱりこのプログラムに加担して一生懸命になってやっておられる。保護者はいったい親たちはいったい、危機感というものを、今の子どもたちの育ち具合の危機感というものを持っているのだろうか、もっていないのだろうか。「そんな心配しなくていい、よそなみに育ててる、これでいいんだよ」というふうに思ってるのだろうか。森さんは「私は大変、強い危機感を持って。これじゃいけないと思ってる」というふうにおっしゃってました。

つまり、通学合宿は、大人たちと子どもたちが共同生活をするというプログラムを通じて、大人と子どものつながりを作り、大人同士のつながりをつくり、学校と地域のつながりを作って、そして、いわば、子どもを中心にして、人間関係、つながりの関係の回復と再構築を図ろうとしているプログラムなわけです。ですから、おそらく、森さんご指摘の親の子どもへの育ちの異変についてこれじゃいけないというその危機感の共有、一緒にもって、それぞれの町や村でやれるやり方でやっていきたいと思います。ということをやったり、基本にし、深めていかなきゃいけないんだろうと思いました。

<南里>

どうも、ありがとうございます。では、第二分科会の学社連携・融合で、森山さん。

<森山>

この庄内町から、車で20分ほどの田川市・筑豊のなかにある、福岡県立大学人間社会学部に所属し、生涯学習論、人権論なんかをやっております、森山と申します。福岡県立大学は、「福祉系総合大学を目指す」と

いうふうになっております。

私個人も、18歳のときから、子ども会活動にずっと関わっておりまして、セツルメント活動で、地域に13年くらい住みつきしました。そして、学校と地域の連携、つながりで子どもの解放・被差別部落の解放・人間の解放ということ、一生懸命考えてきているものの一人です。

さて、私は、この庄内町の生活体験学校なり、生活文化交流センターを含めて大変関心を持っておりまして、学生諸君なんかと一緒に泊り込んだりしております。学会設立にあたって、参加しよう、参画しようということで、昨日は、学社連携・融合分科会の司会をさせていただきました。夜の懇親会を含めてたくさんの方との新しい出会いがありまして、私も大変、勉強、学習させられた次第です。それらを、時間があたえられた、10分くらいでお話ししたいと思います。

第2分科会、学社連携・融合といいますのは、ご存じだと思います。学校教育と社会教育がつながっていくという1971年、昭和46年の中教審答申でも、いわれたことです。しかし、なかなか、実現しない。それで、臨時教育審議会の答申、生涯学習答申なんかで、連携のもう一つ先に行くものとして、進んだものとして、学校と社会教育の融合が言われているわけですね。

残念ながら、主として社会教育の分野や生涯学習の分野からしか言われてなくて、学校教育の方の分野からはあんまり言われてないないわけです。ところが、昨日の発表では、中学校の教頭先生がお二人。それから福岡教育大学の大学院生が一人。そして、社会教育行政の分野からお一人。4人の発表がありました。特に学校の方から「学校をどう地域に開くか」という話や、体験、実践報告がありました。発表順にちょっと申し上げます。

まず、最初に第一発表は、福岡教育大学の大学院生がグループを作って、昼休みに小学校に遊びに行く。つまり、きまった小学校に、遊びに行く。こういったところから遊び支援者という実践をやっている。まあ、考えてみれば私なんかは、セツルメント文化部ということで学生時代に学校を出て地域に遊びに行っていたわけなんですけれども。30年前からずっとやっていたわけですが、逆に学校に遊びに行く、これはいいですね。学校を開くためにということで。たいへん関心と

興味を持って聞いておりました。

それから、第二発表は熊本の人吉市や水俣市で学校の先生をしながらPTAといっても、TがなくなったらPAになるじゃないか！これまた、20年前からいわれた言葉ですけどね。現在もPTA組織にTがない。こういう中で一人のTとして、どのように地域に関わっているかの報告です。6年前ほどから生涯学習、或いは学社連携・融合ということに目覚めたということですからすけれども。それまでは、野球の監督ばかりしてたらしいんですね。それは後で発言があると思いますが。そういう先生が、とにかく意識改革された。教頭になった。「生涯、教頭でもいい」と。「私は教頭が一番地域と学校をつなぐ面ではむいているんじゃないか」とおっしゃるのです。夜、私は話を聞きましたけれども、一週間に2日職員会議があるなかで校長やみんなが話すのではなく教頭にも時間を下さい、と言った。そして、そこで、「今、世の中がどう変わってるのか」「企業のなかでは意識がどうなっているのか」「リストラがどうなっているのか」「だから地域と親の姿がどうなのだ。」というようなことを黒板に貼って1分間から3分間ずつ話をしていく。そういう中で、学校の先生方の意識が「PTAは大事だ」とか「親とつながることが大事だ」というように、変わってきた。それらを、いろんな課題を含めて、お話をさせていただきました。

第四の発表は、地域性の違いもあると思うんですが。私もそれこそ職場が田川市ですが。田川の中学校の教頭さんが、福岡県が現在校区モデル事業ということで29ぐらいやっている、いわゆる、中学校区事業。学力向上校区事業、つまり、家庭の教育力の向上、学校の教育力の向上、そして、地域の教育力の向上という校区事業をですね。いわゆる被差別部落・同和地区がある学校として、子どもを本当に家庭の教育力とつながって育てていくにはどうすればいいか。或いは、総合学習の中でどのように地域の人材とつながって校区づくりをしたかの報告です。そして、子どもの職場体験、子どもが校区の職場をいろいろ動いたりして直接体験をする実践報告。そういったことを含めて、どのように学校と地域がつながってるか、中学校校区の金川祭りを含めてお祭りなんかまで学校でやっている報告がありました。

第三発表は、県内の社会教育関係の方はわかってお

られると思いますが。須恵町の方でイキイキスクール福岡事業ということで、まあ、とにかく、トップダウンの効果があつたんでしょうけども、町長さん、教育長さん、学校それから保護者の方々が一緒になって、ボランティア派遣事業なんかの事務局を学校に置く実践報告です。そして、コミュニティスクール、実は時間があればもっと話したいんですけども、50年ほど前にも、日本では全国を風靡したんですけども、コミュニティスクールと同じような活動です。つまり、二つの中学校と三つの小学校、小学校を中心に校区コミュニティを作っていこうという、須恵町の大変先進的な取り組みです。このいきいきスクールの事業がどのような経過で行われ、どのような問題を抱えて、今うまくいっているのか。というような報告がありました。

で、以上4つの報告と言うのは、まず、学校の中や、社会教育の面からどのように地域と学校がつながっていくのか、それから、市民とか学生が、どのように、ボランティア活動として、学校の中に入っていか。後の質疑応答の時間では、特に市民・学生・院生がどのように学校の中に入っていけるか。そして、社会教育、或いは、学校の先生がこうした活動とどう具体的につながっていくのかの交流実践で話が進んできたわけです。

キーワードとしては、3つのキーワードが出てきたと思います。特に熊本の先生なんかがおっしゃった「教頭はたいへんやろうなあといわれる。しかし、発想転換をすればものすごく楽しい。自分はいきいきやってる。」こういう「発想の転換」ですね。その先生と昨日お話しして出てきた本が、私も大変感動した1986年にでた、元巨人軍監督、広岡達郎さんの『意識革命のすすめ』なんです。私が学生の時代はですね、政治革命・社会革命・文化革命ということを書いてたんですけども、十三、四年ほど前にですね。この広岡さんの本を読んで、意識革命がいかに大事か思いましてここにもってきました。

それから、二つ目が須恵町の方が実践でやってたんですけども、学社連携というのは、結局「ひと・もの・こと」だ。つまり、人は、人間・地域人材をどうするか。二つ目は地域の自然とか施設ですね。こういうのを、もう、コンピューターでリストアップしてた

んです、須恵町の方は。そういうことが人と物を中心に具体的にどういったイベントをもっていか、「こと」ですね。「ひと・もの・こと」ということで地域と学校、社会教育とそれこそ学校教育が融合していく。こういった方向、やはり「ひと・もの・こと」がキーワードではないかとおもいます。

三つ目のキーワードは「ネットワーキング」つまり、学校が地域に開き、地域が学校に開かれる。そして学校は今総合学習であたふたしているわけですね。2002（平成14）年から始まる教育大改革の中ではじまる学校完全五日制とか、それこそ、学校協議会とかです。こういうことで、子育てをしていく中では、それぞれの地域が独自に、ネットワーキングしていく。私、もう一つ本を持ってきたんです。これは日米の教育を比較している、恒吉僚子さんという方が今年の九月に出した本です。とにかく、この本の中にも、アメリカは、日本的な、いわゆる、和の教育の方に教育改革をしようとしている、とあります。逆に、日本は、個性を大事にすることで改革しようとしている。この本は、東京書籍から出ているのですけれども。とにかく、子どもも親も教師も自信を失ってしまっている。とにかく、教師は孤立し、自分の力量不足を問われ疲れきっている。こういう中で、アメリカではしばしば、一人の子どもを育てるためには村全体の支えが必用であると。「It takes a whole village to raise a child」というアフリカのことわざが、引用されている。

こういう形で、今からのシンポジウムを含めて、「元祖生活体験学校」は大変重要になるし、子育て・親育ち・教師育ち・地域育ちのネットワーキングの庄内型モデルというのができるんじゃないかと私は考えております。

<南里>

ありがとうございました。さかんに、キャッチフレーズがでておりました。では、続いて、第3分科会の猪山さんお願いします。

<猪山>

長崎からまいりました、長崎大学の猪山と申します。第三分科会は、地域で作る生活体験ということで、大変みなさん熱心で休憩も一回しかとらないびっしりの

ほんとに豊かな論議がありました。

報告は、従来ですと、地域体験というと子ども会体験が多いのですが、子ども会スタイルは一人もいませんでした。それぞれ新しい現代型の生活体験を作るシステムからということで、お一人は外国にキャンプに行く、それを生半可でなくて中国、ブータン、様々な国で合同キャンプをやるという遊びを中心として取り組んでいるアリギリスという福岡の新しい本格的な組織の発表です。

それから、二つ目は、長崎で自分の所有地を開放しながらすこしずつ、みんなと子どもたちと、五右衛門風呂を作り、創作椅子を作り、料理室を作り、図書館を作るというかたちで開放して、だんだん仲間が増えているという、そういう「ちびっこ創作村」という実践をされておられる入江さんの報告です。

後の二つのうち一つは、山口の宇部市からこれ、ご本人は市役所に勤めておられるんですけど、「今日は、市民としてきました」ということで話ははじまりました、校区的ななかなか難しい中学生の「夢追い人」というグループ作りをされている事例です。地域を作っていく中学生の様々な活動を校区単位でやられておられて、公民館などがそれを積極的に支援をしていく、つまり小さい自治区などでは、もう現代の生活体験の質を作れないのであろうかということから、校区範囲のしかも、中学生に真っ正面から取り組んでいる、非常に感動的なお話でした。

それからもう一つは、これも校区で、お母さんを中心に子ども文化ネットワークという色々な集団がありまして、その一つの実践として甘木市の「三奈木」という校区で親と教師の会がずっと地域の伝承活動・もの作り活動などを多様にやっておられるという報告です。

今、申しましたように、従来の子どもの会行事型を、はるかに超えた新しい地域の体験を作っていくこの生活体験ですけれども、そのことがみんなの胸にじんときて、「新しい時代の体験学習をすすめていく組織化の兆候が非常にはっきりしたなあ」というのがみなさんの感想でした。

討議の柱は、三つございました。

第一は「生活体験とか、体験、体験と誰もがうんざりするくらい、この4、5年いうんですけれども、じゃ

あ、この体験というのは何をやるんでしょうかということが以外になくて。何をやっても体験だから、何かやっとならばいいというのがあるんだけど。今の子どもにとって体験として何が必要なのか。議論しようやないか」ということで簡単に言いますと、4つありました。

ひとつは「改めて自然体験」というもの。キャンプに行くというのは序の口で、本当に自然と交流してですね。色々なものを作り、学び、というもっと野外キャンプなどを超えたような自然接近の体験を本当に子どもにとっていかに大事かということが発表者の一人から言われました。その長崎の人は会社を営んでいるんですけど、「自分がこの10年間、従業員をみて一番よかったのは、小学校のときに、いろいろ野原や山で遊んだ子どもが、一番企業マンとしても伸びていく。なまじ、都市のマンションで育った優等生は全然企業マンとして使いものにならない。」ということが明確になりまして、新しい時代ですね、社会人の基盤作りということでみんな納得したところであります。

ふたつには、「もう一度自分たちと一緒に遊ぶ」という。しかも、既存のおもちゃを使うんじゃなくて、ほんとに作っていく。その点、すぐ、竹馬、竹とんぼというけれど、もっと、竹細工を本格的に作っていったらどうなるのか。それから、炭を作ったり、自分たちの住処を作ったり。こういう「つくる」遊びをどのように本格的に作るかということが非常に大事だと。

3つには、異年齢、或いは、異世代交流ですね。本気になって違う人との出会いですね。今、子どもを調査するとほとんど、クラスの友達しか付き合わないという子どもが圧倒的なんです。だから、そういう点で、異年齢、異世代とのですね、しかも、活動を通じた交流ですね、お話し合いとか、シンポジウムとかじゃなくってそういう活動を本気に作っていく。老人が子どもを教えるとか、じゃなくて、子どもも高齢者に教えたりするというそういう、まみえたものを作っていくべきじゃないか、色々な実践は中学生はだめだということけれども、小学生から育ててジュニアリーダーとして実によく異年齢で世話をするというのを改めて注目するべきではないか、ということもできました。

そして、体験の4つめにですね、今、子ども達はほとんど親たちが買ってきたものを中心に生活をしてい

るという状況の問題です。これをどのようにこえていくか。地域体験は地域体験の積み上げの中で、家庭でできないものは地域で創造していく地域体験作り出していくべきではないですかね。例えば、料理をはじめですね、色々な物を地域で作るんです。こういうふうにして、体験するというのはどういうことかをですね、今こそきちんとしかも地域で出来ることはなにかという話をしました。

第二は、どういう形で進めたらいいのか方法の問題です。

庄内町のように、或いは、学校のようなシステムがある場合、これをですね使っていくというのがあります。しかし、どこの地域でもそれができればいいのですが、そうはなってはいません。地域のエネルギーをどうやっていくか。その場合に、この4人ともですね、非常にはっきりしていたのは、子どもがですね、まず、企画したり、組織を作るというものにしていくことが大事だということです。大人が、教師が作って、子どもなんかにやらせる。「やらされ体験」をしても、思い出作りに終わる。本当に体験がその人の人間を変え、本当の友達をつくるという場合には、子どもが、企画や活動、或いは、組織を作っていくこと、これが大切だということが今回はっきりみえました。

第三は、「大人は本当に参加するんか」「大人はどう呼びかけるんですか」という話をめぐって。

「今の経済で人のために働く大人はいない。そんなことをですね、パンフレットのつちやちょっとした呼びかけで集まるなんて錯覚せんほうがいい」という話ができました。それで、みなさん、集まれるもの、小数からでも本物を作っていけば、だんだんだんだん、人はゆりうごかせるんで、あまりはじめから大きい組織を作って動員的に動かす、そんなことは考えるべきではないという意見ができました。

非常に大事なことがはっきりわかってきたんですけど、特に、参加していきいきしている大人たちが変わりはじめていく。そこに関わっている大人が変わらないで、ちょっと子どもに教えたり、体験をさせたりしても、子どもは感動しない、ということですね。大人もそこで変わる組織であることが大切なのです。また個人でもやれることがあるのですから、あんまりはじめてから組織でないといけないこともない。長崎の入江

さんのように個人でもやれるんです。或いは、自治会子ども会もあるかもしれませんが、これからは組織としては校区でやる。まだまだ、これからでしょうけれども、NPOという法人を作って、少し本格的に法人化して本格的にやる。そうはいつても、お金や資源で力が弱いので、社会的なそれを支援する仕組みをですね、どう作ればいいのか。

そこで注目されるひとつは公民館というもの。改めて公民館を生涯学習センターにした方がいいという意見や、やはり公民館が本当に地域に根づくことが改めて子どもの体験を作るために大事だと。ややもすると学校がのりだして、学校がやろうとするんですけども、公民館こそまず原点を作る。庄内の生活体験学校が何なのかという評価をした場合に、色々難しいところあると思うんですけども、地域の子どもの公民館であるというふうに考えた方がいいのではないかと話もありました。

公民館こそが、子どものしかも校区の公民館こそが大事。子どもについては、公民館が自分たちの地域作りの原点という意識が非常に強いから他の集団が支援者として、或いは、協力集団として一緒にやるのは無理だとしても、本格的に真剣にやれば、一緒になってくれる。行政ももっと、お金ですとか、専門指導者、システムこういうものをやってほしい。企業の人は何人かいましたけれども、今企業も、さっきいったように、今の子どもたちが使い物にならないという。日本の企業が金だけもうけているのはいいのか、という反省もあってもっと地域と一緒にという動きがでています。

地域にある商店街や地域産業は、子どもに元気があるということは、自分たちの地域の活性化と重ねて考えられやすいので、もっと、企業も、お金を出して支援するだけではなく、いろんな形で地域の活動に参加してほしいという話もありました。

<南里>

猪山さん、ありがとうございました。最後に、第4分科会の古賀さん、お願いします。

<古賀>

第4分科会・子育て支援の司会を務めさせていただ



きました、古賀でございます。それはそうと皆さん、少し考えていただきたいことがあります。それは、こういう場に本当は主人公であるはずの存在がないということなんですね。子どもたちがいないということがやはり一番大きな問題だろうと思っています。もちろん、今いないから問題なのではなく、今はいないのが当たり前なのです。こういう場に子どもが出てくるようなそういう仕組みだとか、社会を作ること、そのことが重要な課題となっています。

そのとき、それと重ね合わせたとき、問題は、じゃあ今の子どもたちはそういう可能性を持っているのか、つまり、現実にはこういう場に出て来ないんですけれども出てくるだけの力を持っているのか。いやいや、そんな可能性すらもう、ないんだよか。その2つのどちらの視点や捉えかたで子どもをみていくか、これが、私たち第4分科会の大きなキーワードと申しましょうか、全体の問題意識であったように思います。簡単に、4つの報告を説明、ご報告させていただきます。

第1報告、甘木市で子ども文化ネットワークの活動をされているグループでは、若いお母さんを中心に、子育てお助け講座という講座ものを企画されまして、それもですね、自分たちだけで決めるのではなくて参加者のアンケート調査をしながら、テーマだとか、話す人を探していく。そういう活動の中から情報誌の発行、それとどうしても若い母親対象ですから、子どもがいます。そこで、託児というサービスをやっております。講座の提供と情報提供と託児スタッフという三つの柱で活動されている姿が報告されました。

2つ目の福岡市の「びーなっつ」。これも、子育てが終わったお母さんが、公民館のボランティア養成講座で学んだ成果、学習の成果をそのままボランティア活動というふうに移されていて、しかも寸劇という身体を使ってですね、誰にでもわかるような伝え方をしている活動が報告されました。甘木市の活動、福岡市の活動、だいたい実働は15人くらい。このあたりの規模が一番活動が見えやすいスケールかなと思います。

3つ目に庄内町立生活体験学校を支えているボランティア組織の事務局の方から6泊7日で実施されているロングキャンプの報告。庄内町から福岡市までリアカーをひいて途中でキャンプをしまります。中には、県庁にキャンプしようとして怒られたりなんかも

しました。おもしろかったことは、泊まらせていただいたところでは、必ずトイレを掃除して帰るという「一宿一飯の義理」を尽くすというロングキャンプの考え方です。ただ、そこで指摘されたことは、そういうふうにロングキャンプに関わろうとする、ある意味では積極的な子どもたちも2、3日は何をしていたかわからない。ただついてくるだけ。ご飯をつくるにしてもですね、待っているだけ。そのついてくるだけ、なにをしいいかわからないという時間をじっと待つという耐性、横山先生がよくお使いになられますけれども、がまんするというのは、子どもたちだけじゃなくて大人の側にも必要だということ、そうしないと、6泊7日のキャンプは、やっていけないということだろうと思います。

4番目に赤間保育園。保育所も今は、いろんなサービスがありますけれども、こちらは、10年前からですね、今度の制度改革の前からそこにいる園児の保護者だけではなくて、そこにきていない園児や子ども、保護者を対象に、子育ての講演会を開く、或いはいろんな参加する機会を作るということをしていました。その中でみえてきたのが、講演会にはこないけれどもいろんな心の悩み、育児の悩みを持っている人たちがたくさんいるということ。そういう人たちに対していわば、カウンセリング的な場、「コンサルテーション」という言葉をお使いになりましたけれども、その場の提供と、もうひとつ、空教室を開放しての子育てサロン。そこにお弁当を持ってきていいですよ。子どもが通園していない家庭なんですけれども、そこを自由に使って下さい。或いは、七夕だとかいろんな行事を作って、その人たちに活動の場を提供する、そういう報告でした。

以上が、報告の簡単な紹介ですけれども、冒頭にも申し上げました。今子どもたちは生きる力とか、生活体験を作っていくだけの力、つまり、可能性ですけど、可能性があるのか、それともそういうことはもう完全に欠落しているのか、そのあたりは、やはり、私たち大人が子どもをみるとき、重要な視点だと思っています。それとともに、4つの報告の中で上がってきたことは、子どもが生きる力を持っていない背景には、大人や親たちの生きる力がない。例えば、「子どもとどういふふうに関わりたいのかかわからない」「子どもと一緒にお

ふろに入るということすら気づかない」など、さまざまなかことがでてまいりました。

それらを整理して、子どもの側の問題として2つ、大人の側の問題として2つ、まとめさせていただきます。

子どもの側の問題点といますか、むしろ、キーワードとしてでてきたのが、「子ども文化」という言葉です。子ども文化を認めようという時には子どもには、大人にはない固有の文化があるはずだということと「子どもには自分たちの文化を創造する力があるんだ」という認識がそこに問われています。子ども文化の創造、これが非常に大切な言葉として子ども側にできました。

子ども側の言葉として、もうひとつ大切なことは「子育て」ではなく、「子育て」という言葉をどう理解するかということです。これは、甘木やびーなっつの活動の中に出てくる言葉です。乳幼児を対象としては「子育て」なんです。しかしながら、思春期といいたしうか、中学生、高校生の場合はどうでしょうか。「子育て」というプログラムをどうやって作っていったらいいのかという、発達段階に応じた子どものとらえかた。「子育て」と「子育て」を区別するという。このことが、子ども側の2つ目の問題点として提起されました。

3番目の問題、大人側の問題点を2つ申し上げますと、いろんなところで指摘されたのは、「どうして、子育ての問題に悩むのは専業主婦ばかりなのか」。ちょっと前までは専業主婦は優等生でした。悪いのは、仕事を持つ母親でした。仕事を持つから子どもは非行化するとみんな本気で信じていました。今、それが完全に逆転しています。子どもの非行は専業主婦の方が多いです。母親自身も問題を抱えているし、子ども自身も問題を抱えている。そうした状態を、これは赤間保育園の方ですが、「密室の中の保育」というふうに表現されました。それに、対置されるのは「地域の中の保育」。「地域で支える子育てシステム」をどういうふうに作っていくか、その視点がないからこそ、小学校の段階で生活体験という新しい課題がうまれてくるのです。地域で子育てを支える、これは一応乳幼児から中高生を含んでですけども、そうした問題意識がとらえられました。

ただ、4番目に、そうした「地域で支える育児システム・子育てシステム」といったときに、大きな落とし穴があるのではないかと、つまり、子育て支援が実は「子育て放棄」を促しているのではないかと。あまりにも、社会の側が保育サービスを含めて、子育て支援を整備していけばいくほど、子育てを放棄するような大人や親を結果しているのではないかと、というこの落とし穴。このことについては、みなさんたちにもいろんな考え方があると思いますけれども、その課題もとらえられたように思います。

確かに、現代の社会で、子どもの自主性にまかせるということは、実はほったらかしのことがたくさんあります。信頼という言葉はいつも放任の裏返しとなっている部分があると思います。生活体験プログラムを創造するといったときに、どれだけ私たちが責任を伴って子どもを信頼するのか。そのあたりをきちっと保障しないと、地域で支える「地域の子育てシステム」或いは、「地域で支える生活体験創造」の大きな落とし穴になるのではないかと。こうした事柄が分科会に参加した者の共通というほど大げさなものではないかもしれませんが、懸念みたいところがあつたように思います。

繰り返しますと、1つ目が「子ども文化の創造性」。2つ目が「子育てと子育ての違い」を考えること。3つ目に、「密室の中の保育」に何を地域で対置させることができるか。4つ目に、しかし、そのことが大きな「落とし穴」を作っていくことにはならないか。以上、4つの論点が分科会の総括としてでてきたように思います。

<南里>

どうも、ありがとうございます。今、ちょうど予定通りの時間でございます。本当は、ここで、今の報告の中でお話いただいたことを、少し補足していただきたいと思いますが、それは、次の論点の中でしていただきたいと思っております。

各報告の特色をまとめてみますと、正平さんの報告に、私なりに気づいたことは、「元祖通学合宿」という言葉キャッチフレーズがでてきて、「生活体験がそれぞれ違うことが当たり前」ということ「地域の関係性」ということを、非常に強調されておりました。

さらには、森山さんの報告の中では、「開かれた学校」が問題になっておりましたが、その逆に「学校にはいっていくということ」と、それから、もうひとつは「意識革命」という問題。またさらには、それぞれの「生活体験学校のモデル」をどのように作っていくのか。特に庄内型モデルをどのように広げていくか。

猪山さんの報告では、キャッチフレーズの連発でした。しかし、非常にいいことを言っておられ、強調されていました。「遊びの豊かさ・多様性」という問題。それから「世代にまみえた交流」。「まみれた」、「それぞれ世代間」と私たち使っておりますけれども、そうでなくて、それぞれが「まみれるということ」。これも、非常に大切な問題かと。それと、横山さんと共通で「やらされ体験ということで、思い出体験で終わりがたくない」という問題と。私などと共通いたしますが、生活創造の地域体験。サポートするのは、地域であり、公民館である。地域の商店街は崩れてきており、それこそ、年に30万軒なくなっているそういう現実があります。そういう中ではできないんだと、キャッチフレーズといたしましたけれども、非常に大切なことを言ってもらいました。

最後の古賀さんの報告は、それぞれまとめていただきました。「大人と子どもの接し方」「子育て」ではなく「子育て」という中身の問題。それから、「密室の中の保育」ということ。「子育て支援の整備」ということが、逆に委託つものを作りだして、そこに大きな穴を作って、落とし穴を作っていくんじゃないかというようなことをいわれました。最初に、横山先生が言われた体験が非常に欠損しているということは、そういう無気力な状況を、背景としている。マージナルな段階では、幼児期から少年期、少年期から青年期、青年期から大人へ、それぞれの発達段階の中で、少なくともイニシエーションとか、いろんなことも含めて、地域が深くきちっと体験させなければならない。マージナルな部分との問題がなってきた。その中でイニシエーションとか体験っていうものが、欠損している。主体的な生きる力というけれども、本当にそういう力がついてくることによって最初の問題提起にぴたっとつながっています。

そこで、これからそれぞれ、三つの柱で少し話していただきたい。一つは、子どもは今なぜ、生活体験と

いう考えていかなくちゃいけないのか。従来から、生涯学習審議会や中教審議会で、いわゆる子どもの発達基盤としての生活体験という具合にいられておりますが、生活体験であれば、なんでもいいのかという問題。庄内の生活体験の非常におもしろいのは、いいことだけ生活体験させているんじゃないで、悪いことも生活体験させているんですね。これも、生活体験なんだという発想なんですね。みんな大人はいいんじゃないで、大人は悪い人間もいるとこれも生活体験だと。ボランティアはみんながよいんじょでなく、悪いこともやるから、そのことを子どももちゃんとわかっている。ここまでいくと、キャッチフレーズがぼんぼん飛び交うような捉えかた。これで、森山さんが言っていた捉えかたの発想の転換で、それをどうするかという問題ですね。

二つには、生活体験を作り出す内容論・方法論。人間が生きることについて、人間が生きるその基本的な問題が崩れている。能力の基本的なところが崩れてきていることに対して、いったいどうすればよいのかという問題。このことは、決して今日だけで議論できませんのでそれぞれのヒントを出していただきたい。

それから、三つには実際に、それぞれ学校や社会教育者たちもどうやって汗をかいていくのか、というこれからの方向についてです。この三つの柱で話をしていきたいと思えます。

まず、正平さんの方から、昨日話題提起を3点出してもらってます。それに添って各々の方に発言をお願いします。正平さんには、第一点としての「子育て」の異変に危機感を持っている。根本にその辺の問題があるのではないかとということで、なぜ、生活体験かということ結び付けていただきたいと思います。2番目には、森山さんに発言を用意していただきたいと思います。それぞれの立場、それぞれの発想の転換はどうしていくのか。それから、3番目に古賀さんには、子どもの自主性、自立性と子ども文化とはということで、よろしくをお願いします。

<正平>

3分ですね。私はずっと子どもたちをみててですね、やっぱり決定的に欠けてる点は働くということを教えられてないということですね。ところが、親御さんの

態度とか言葉からは、私が感じている危機感みたいなものは、殆ど見えてこなくて、やがて大きくなればいろいろなことが出来るようになるだろうと、そういう感じなんですね。実は、子どもはやったことのないことは出来ないものでして、子どもがいくつになろうが、やがて出来るようになるということはないんです。そのところが分かっただけにないという点は、相当な開きがありまして、これは切ないものがありますね。

子どもに働くということはどういうことなのかを全然教えてない。これはほとんど深刻なくらいに教えられていない。例えば、「お茶碗を洗え」といえば、横にある箸は洗わない。「箸を洗え」といえば横にある鍋は洗わない。「自分の使った物を洗え」といわれたら、みんなで汚した台所をきれいにしない。そんな様子を頻繁に見ていると、一体これで子どもは一人前になるんだろうかという、たまらないような危機感をもつわけですよ。だから、「なぜ生活体験か」と問われても、これほどまでに働くことができない、それも自分の生活の場面で自分でやるしかないような仕事ができないのですから。

逆に、「こんな様子で暮らしていて、いつかこの子は一人前の大人になれると思っているんですか？」って、問い返したいくらいですよ。仕事に取りかかる説明をしている場面のことですが、「今からご飯をつくるよ」とか、「みんなでお掃除するよ」とか、職員とかボランティアが話して聞かせるじゃないですか。それを聞いている時の子どもの目、ドローンとした目ですよ。集中してない、ポケーツとして聞いている。さあ、仕事に取りかかろうという時になって、「何、するの？」「どうするの」という騒ぎになってしまうんです。そういう場面を見ていて思うのは、通学合宿での仕事もさることながら、これでは、学校の勉強にもついていけないんじゃないかならうかと思ってしまうんですね。

なぜ、こんな風になるんだろうかと考えていくと、やっぱり日常の暮らしの仕方がくずれているんじゃないだろうかと、そういうところに行き着いてしまうんです。子どもの生活リズムが崩れてしまってるんじゃないかということです。夜、遅くまでテレビを見る、それでいて、親から一度もガツーンと叱られたことがない。テレビを見ながら、晩飯を食べる。目はテレビの画面を向いて、耳はテレビのスピーカーに、口だけ

パクパク動かして食事が終わる。それで、最後に形だけの、「ごちそうさま」を言う。そんな夕食を続けていたら、「ごちそうさま」という言葉に込められた感謝の心も満足感も子どもの心に育つはずがないわけですよ。晩飯の時ぐらいテレビのスイッチを切れ、大声出して言いたいですね。

毎朝、毎晩の食事を作るのに、どれだけの苦労や苦心があるのか、子どもには全く伝わっていないのです。ここの、生活リズムや生活態度を小さい頃からビシッと修正しなきゃ、今のままじゃだめですね。

<南里>

どうも、ありがとうございます。今の発言の中でもやっぱりやってないことはできない。しかし、人間だから、見本があれば、できるんじゃないか。しかし、それが現実には出来ない。横山先生、ちょっと、補足していただけますか。

<横山>

その通りですね。やったことがないこと、例えば、ちょっとした生活習慣のひとつにしたって、遺伝子が働いて3歳になったらできるというものではないんですよ。生活技能も、自主性も、我慢する力も、思いやりの心もみんなそうですよ。やはり、体験を積み上げていく中で身につけていく。

人と関わる能力もそうです。どういうふうにとけんかするか、まとめるか。このこともやはり遺伝子が働いて自然に身につくものではない。「人とまみえる」ということ言葉がありましたけれど。人と人との関わり方の体験のなかで身につけていくわけです。

ついでに言いますと、教えられる体験がないと身につかない能力もあります。道徳それです。これは、いけないことだよとしっかり教えられて、はじめてわかるのです。遺伝子が開花して12歳になったら自然に12歳なみの行動ができるというものではないのです。そのへんところが、一般的には忘れられているようですね。子どもの発達には環境が大切だとよく言われますが、現実にはいわば、自然発生説をとっている人が非常に多いように思います。

<南里>

横山先生まで、キャッチフレーズの「自然発生説」とは。そのへんのところがまさに、発想の転換ですね。私は、パラダイム転換といいますが。ところでそのような子どもをどうやって捉えたらいいでしょうか。

<森山>

あのですね。私、子どもが今危ないと、正平先生や横山先生がいつてらっしゃることはわかるんです。私の言葉でいえば「複合発達阻害」ですね。これまた、キャッチフレーズといわれますが、学問的にうらづけられていると思っています。そして、実践をしてきた中ですね、危機意識があるから言葉が出てくるんですよ。有吉佐和子さんが、「複合汚染」76年に公害問題を言いましたし、上野千鶴子さんが「複合差別」と言いましたが。私は「複合発達阻害」。なぜそうなるかという観点から、私は、正平先生と議論したいくらいです。正平先生は、必死に今子どもはこのままじゃいかんといわといかんといわれましたが、私は、胸が痛む。つまり、犠牲者は子どもだ。大人が悪いとは言いません。社会のあり方が悪いといっているのです。

端的に言えば、昨夜、幼稚園長さんとも話をしました。9時半くらいに幼稚園の子どもが乗ってるバスの幼稚園は少子化の中でもうすぐつぶれる。昨日赤間幼稚園の副園長先生も了解してくれましたけど。私は、幼稚園長を5年半しました。つまり、子どもがバスで一時間くらいかからないと集まらないから、往復2時間かかるわけです。で、4時間幼稚園にいるわけです。そしたら、2時間バスに乗るということはつまり、もう、運動もできないし、何もできない。長時間の幼稚園バスは、監獄の護送車です。

M.フーコーなんか学校は監獄であるといいましたし、古賀先生がですね、子育て支援システムが子育て放棄になったらいけないと言いました。学校が今そうなっているんです。教育の為に学校ができたつもりだったのが、学校栄えて教育は、今滅んでしまったんです。監獄なんです、学校が。こういう見方をするのが発想の転換なんです。パラダイムの転換というのは、もうちょっと、認識枠組みとか認識枠組みの方法なんです。

そういう面を含めて、子どもはその中を、必死で生

きょうとしているんです。いろんな方向がありますけど、一つだけ例を言います。

例えば、メディアが悪いといいますが。でも、発想の転換からいけば、つまり、ポケモンなんかなぜ流行るか。子どもは野性的なんです。喚起力があるんです。庄内町の園長先生が「おらあ、明日、幼稚園行ったら6回くらいばたばたと打たれて死なんといかん。」と子どもと遊ぶわけですよ。ばたばたと打ちたいというのがある。そういう野性の精神ですね。私は、21世紀は、マルチメディアの時代と野性の両立だと思いうのですけれどね。ポケットモンスターとかメディアにとられてしまっているんです。で、そのメディアのなかで、ばきゅん・ばきゅん・ばきゅんと討つことによって自分の野性性、生命力を発揮しているんです。だから、それを、具体的な直接生活体験の中に取り戻さないといけないんです。これが、発想の転換であるし、生活体験の必要性・方法であるわけです。話せば、長くなりますけれども。

<南里>

はいはい。長くなります。

<森山>

例えば、私昨日「鉄火味噌」というのをここの庄内の婦人会長さんからいただいたんです。おかえしに、今日は「みょうが」を持ってきたんです。鉄火味噌、子どもの骨が硬くなる、子どもの歯が弱いからということで、鉄火というのは、大豆をいれて、そして、固くなっていくような味噌。こういうですね、それこそ、子どもの食べる、食生活の問題から考えようとしているのがこの庄内町の中にあるんですね。「庄内鉄火味噌」と命名したい。附加価値をつけるのです。そういうことを含めてですね。子どもの本当にもっている喚起力を発達するような子育て、子育てをやっていく。こういう方向じゃないかと思っています。

<南里>

ありがとうございました。なかなか挑戦的な発言でした。まあ、もう少し、そういうところを、穏やかに古賀先生、子どもの自主性・主体性・自立性という、子どもの文化ということで、複合発達阻害ということ

に対してお願いします。

#### <古賀>

今、最後にですね、森山先生、「野性性」という言葉を使われました。私は、非常に大切な言葉だと思っております。どういうことかと申しますと、今、子どもたちをみると、からだところを分けて考えなきゃいけないってことなんです。

身体、からだの方は、からだの中にエネルギーがあり、火山で言えばマグマみたいなのがたまっているわけですね。それが、今野性として噴き出す。ところが、日頃はこれ、休火山と同じで死んだようにしている。どちらが、子どもの本当の姿なのかと聞かれた時に、やはり、からだの仕組み、身体的能力として診ることができる専門家が必要になる。小児科のお医者さん、歯医者さん。或いは、栄養士の方。そういった方の知恵を借りなければいけないと思います。ま、宣伝になりますけれども、この学会はそういった人たちとも一緒に作っていきたいという思いがあります。

私たちは、子どもの心については、ある程度、理解できるんですけれども、こころとからだ一緒だったときにはそれでよかった。ところが、からだだけがひとりで動き出すような子どもの場合には、どのように見たらいいのかわからないというのが一点。

それから、2つ目。先ほど紹介したことに関わることなんですけれども、庄内町のボランティアが子どもたちと一緒にリアカーをひく。からだとからだをつなげる、ということです。おそらく、余計なことは一切いかなかったでしょう。一緒にひくことの中で、子どもたちのからだ体験としてメッセージが伝わったと思います。「ぴーなっつ」の活動では寸劇。せりふだけではありません。むしろ、言葉以上からだの表現がまさに、ボディランゲージとかいいますけれども、メッセージとして伝わっていく。その役割をきちんと私たちが理解しなければならぬだろうと考えています。

そして、3番目に「生活創造」という言葉。平たく言えば暮らしを作り出すということなんですけれども、「じゃあ、子どもたちの中で暮らしって言葉は何なんだろうか」といったときに、私は、子どもたちの生活の中には生活はあっても暮らしはないと考えています。どういうことかと言いますと、暮らしは伝承なのです、

前の世代からの伝承。もちろん、革新もあります。だから、前の世代のものを受け継ぐことによって、暮らしって言葉がでてくるんです。ところが、生活は英語のLIFEを訳しただけなんです。テレビの中ででてくるものも、身の回りのことも一緒に生活という言葉で呼んでいる。

そういった意味では「生活創造」の中の暮らしと先ほど、正平先生が言われましたけれども、からだを動かすときに気づきができるかということです。気が付くというのは、からだが動いた次の段階なんです。だから、「うわあ、一緒に洗うんだから友達の分も洗おうか」ということに気づく以前の課題として、ものを洗うという動作ができるかということなんです。からだをどれだけコントロールできるかということが、暮らしを作り出す第一歩だと思います。

#### <南里>

ありがとうございました。さきほど、猪山さんのところに出されてきた「生活文化創造」と「生活体験」、これが、生活体験の非常に大きなキーワードになっているということなんです。ですから、やってないことはできないというのと次は遺伝子っていうものが働いてでいくのだ。というのは、実は自然発生説では、だめなんだというのに対して、森山さんが複合発達障害説で子どもたちのなかには、生きようとする野性の精神があり、そのせめぎあいをしている。そのへんで猪山さん、さきほど古賀さんが言われた、暮らしとその生活体験ですね。特に生活体験との関係で今なぜ、生活体験なのかってのを短くお願いします。

#### <猪山>

正平先生をはじめ、興奮しはじめまして、私がしずめられていつもは私が一番興奮するからあんなふうにいわれてるわけですね。実は、まあ、みなさん、言われてることと関係するんですけれども、5年前にですね、日本小児学会という医者の会がありましてね、で、そこで、なぜか私よばれて「今、子どもたちは」というシンポジウムがあったんですね。そして、帰ろうとしたら、こうぱっとみたらですね、色々子どもたちの最近の身体の、古賀先生が言われましたけれども、病気ですね。はっきりはいわないけど、言うとは非常に問

題になるんですが、今の10代の子どもたちは、だいたい高齢期社会はもう、ないというのが今の医者予想ですね。だいた40を超えたところで3分の1は病気になる。

つまり、種の根底のところはですね、危機というのを超えて、非常に少子化社会ですけども、非常に深い危機はやってきている。じわりじわり危機がきているということなんです、そのひとつは人間が自分からですね積極的に動いていくという、体の動きを作るというのが、生命の根元なのに、今はなるべく楽をした方がいいですね。僕も、自動車をもっているから、あれなんですけど。

つまり、なるべく楽をした方が本当に幸せか考え直していかないといけないんです。楽はいいんですけども、もっと積極的にですね、からだを動かしていきることがですね。動物の原点であるということがですね、狂いはじめています。

現われているとことを古賀先生も言われましたけれども、すぐ喜ぶのはスポーツ関係者。「だからスポーツを！」となるんですけども、これ、スポーツはですね、誤解したらいかんけど、からだの3割しか使えない。あれは、筋肉を作っているだけで、だから、相撲取りなんかは短命の人が少なくない。画家が一番長生きするんですね、それと主婦なんかが。どういうことかといいますと、身体を日常的にこの内臓近くをですね、手足を動かして物を作るというのが一番からだ作りになるんですね。だから、本当はもう一度スポーツやキャンプなど仰々しい筋肉マンをからだから、生活的身体を作る、これがひとつなんです。

もう一つは、南里先生といつも話しているんですけども、暮らしをするだけではおもしろくないねと人間のよさを二つ目は何かチャレンジするんですね。みなさん信用しませんけど、僕は週2回ごはんを作るわけなんです。はじめは、嫌になって離婚すると思ったんですが、これは思い直して新しいものを作ろうと色々してくると。買って来たものっていいなあって思うんですけど、一週間ですよ。自分がこう作って行って、だんだんだんだん、学生食べこいとか、いろいろいたりして、だんだんだんだん、チャレンジをするってところよこびがあるんですよ。

発想の転換ですね。つまり、やっぱり思います。今

の学習がなぜおもしろくないか。やっぱり学習はおもしろいんです。与えられるだけを覚えないかんから人間はおもしろくないんです。やらされるから。

そして協同し合って作るということ、創造するってこと。だから、古賀先生にいますけど、半分は暮らしを伝承しない生活創造はないけれども、それに、プラスですね、どのようなカツトシちゃんカレーライス方式を作るか。庄内だって、後、10年したらあぶないですよ。もう一段階、このボランティアのお母さんからもらった梅干しは、庄内鉄火味噌は、これをどう作り出すかということに、子どもはものすごく燃えます。で、みんなで、ヨットを作ろうとか、竹とんぼをですね「30メートル飛ぶ、竹とんぼを作ろう！」といたら、子どもはほんと、そういうことで燃えます。

私たちは、ワンパターンしか、してないんじゃないか。地域でやったことはそこで終わりでですね。家庭に帰って作ろうとか。

かっこいいこといいですけども、やっぱり21世紀は、愛の創造を楽しくやる人間ですね。やらされていたらですね、言われないとできんけど、ほんとに楽しくやってたらですね、一緒にやろうというのが絶対でできます。我々の分科会でも、中学生が「僕達やりたい」と「教えない」と楽しかったからですよ。

だから、新しい人間関係を作らないと今のお母さんの半分は友達さえいないんですから。ふたりぼっちということばがあるんですよ、密室で。ひとりぼっちじゃないんですよ。子どもと私は密室でということですから。「子どもと私は天涯孤独」と。福岡でも長崎でも児童虐待法研究会ってのがもうあるんですから。出来たんですよ。悲しいことに。

だから、もう一度、人間の関係の愛をですね、生活創造体験という形でどのように作り出していか。僕も、興奮がついにきまして、申し訳ありません。

<南里>

もう少し、それぞれ生活体験の背景をどのように作っていくのかについて、発言してもらいましょうか。

森山さんは、複合発達障害ということで、野性の精神が子どもの中でせめぎあっているということ。しかし、その前に、正平さんが教えていかなければならないことは我慢であると。

もう一つは、森山さんが、生きようとしている中では野性をどう表現しようと子どもたちが何をとりあげるかということ。この部分を生かしていくことが大事なんだ。しかも、古賀さんのところでは、身体と心を分けてみる。そこをどう見分けていかなければならないのか、ということでした。

しかし、もう一つには、生活というのと、暮らしという、伝承を基盤にした生活体験が必要である。猪山さんは、暮らしも身体的な発展であると。伝承だけでなく、新しいチャレンジという部分が非常に大事であり、人との愛ということまでふれていました。

では、生活体験の中身を、これからどう作っていくのか、私は基本的には、古賀さんのいう身体と心。森山さんの複合発達阻害、とくに野生的な問題もありますが、人間として能力を本当に発揮していく、発揮できる子どもの基本的能力、その形成する基本のところが崩れてきているということが気になります。そのこところにどう生活体験をむすびつけていくのか、チャレンジとか生活自体の問題、それから、生活文化創造が伝承だけでないということと子どもの基本的能力とむすびつけた生活体験ということについて、3分ですがよろしくをお願いします。

<猪山>

簡単にいうと、地域の前にですね、家庭生活をどのように再編成していくかというのが、私たちは問われていると思うんですね。もう、簡単なことなんで、家庭生活を作る生活ですね。転換すると、まあ、いうことでして。

ここの会長の朝原先生の家には、泊めてもらったんですけど、朝原先生が元気なのは家庭菜園を作ってますね。まず、食材から今全国的にも市民農園とか家庭菜園いうことで、すぐさまはできませんけれども。

やっぱり、あの、作る生活へ。使う生活から作る生活へ。しかも、大事なのは、絶対、子どもも家庭人として、参加をする、一緒にですよ。これが大事です。出来れば、もう一つ先に、子どもらしいものを作っていくことも、もっと支援していくということは、大人相当努力がいりますけれども、大事だということを是非言いたい。

子どもだけの生活体験を取り出すんじゃなくて、私

達の文化からほんとに大人自身の生活の取り戻しということをですね、大人の参加が大事だと、私はそう思う。なまじ変な指導者意識ですね、ちょこっと体験させるというようなは自己満足でなくて、もう、一步踏み込んでやっぱりいくということが必要なのだと。

やっぱり家庭だけでできないことが実は、森山先生もいいましたけれども、自然と本気になってまみえさせるということ、野性もあるし、心の安らぎもあるし、自然というものがもっている力をもう一度お借りしてそして、そこに子ども達を接近させていくことが大事なんです。

新しい、お互いがですね、生かし合う人間関係をどう作るのか、これが歴史的に非常に重要なことです。僕が一番嫌なのは、かつては、おやじがおったと、誰かの指示で動いていくことを強調する考えはだめで、それぞれが生かし合う人間関係ですね。これはまだ、歴史的にモデルはないと思うんですね。だから、今の暮らしの中では、お母さんが中心か、お父さんが中心かしかない。そうじゃない。子どもも主人公として生かし合うような、人間関係が大事だと。対話とか教育委員会は言ってますが、そんな歯の浮くようなことを言ったって全然だめなんです。横にならんで、語り合う話し合う、真向かったところで、何を話す？何もないですよ。という捉えかたをしないと。

今、若者や若いおとうさん、おかあさんは子どもを育てるところか一人の人間関係ができない。こどもの人間関係も含めて、色々な問題が起きているということ、を皆さん感じませんか？

<南里>

ぱっと、当てるといい内容がでできますね。使う生活から、作る生活へ。それと、子どもの生活だけじゃなくて、大人の生活も大切だと言われました。本当に、すばらしい。「生かし合う人間関係」これはすばらしいキャッチフレーズができましたね。

では、古賀さん、返答しなければいけません。少し、子どもの自立というか、子どもを主体にして色々発言してこれましたが、暮らしの問題にしても、子ども自身の暮らしを作るということと、子どもの心とからだの問題、そのことを少しお話いただければと思います。



## &lt;古賀&gt;

私は立場が社会学という立場でございまして、特に地域作りとか、地域の活力をどうやって作るかっていうことに関心をもっております。したがって、始めに申し上げたいのは子どもたちに生きる力をつけるということは、私の場合は「仕掛け」であって「目的」ではありません。

つまり、子どもたちに生きる力をつける活動に大人たちが関わることで地域が変わる、そのことがもう一度子どもたちに帰っていきたくらうというふうを考えています。子どもが変わることは、基本的に大人が変わることというのが出発点です。それを踏まえて、お話しさせていただきます。

先ほど猪山先生、「ふたりぼっち」という言葉をお使いになられました。「母子カプセル」ともいわれますけれども、そんなとき私たちは、どうして、悩みがあるんだっただれかに相談しないのかと、素朴に考えるわけです。ここで大切なことは、人に相談するという行為も実は、学習の結果、可能になるということです。人に相談をするという関係の仕方そのものも、実は学んだ結果として出てくるのであって、自分では、おぼろげに考えていた自分の問題というものが少しずつ人と関わることによって明らかになってくるということなのです。

つまりここで大切なことは、人と関係する力を大人たちが持っているか、持っていないかということ。その時にベースになるのが、やはり、私は伝承というものだと思います。

今、自分がどういう暮らしの中にあるのかという問いが、自分を見つめる出発点だと考えています。そして、猪山先生は、伝承に対して改革か創造という言葉を使われました。しかし、私たちは独りでいるときには、伝承は出来ても改革はできません。

改革は人との関わりの中で初めて生み出される力です。いろんな社会的な参画活動の関わりが重要なことはいまでもありませんが、現実には、関わるところから出発するのではなくて、関われない問題がどこにあるのかと考えなければならぬだろうと思います。

分科会の中で、赤間保育園の方が「講演会に来るお母さんたちは、そこで聞いたアドバイスで自分の問題を解決する能力をもっている。ところが、そこに来な

い人たちは、そういう能力がない。関わる力がない。それが一番大きな問題だ」と言われましたけれども、それは大切な指摘です。そして、関係を作り出す力を大人がもつこと、それは、伝承という発達課題をベースにして始まることだと考えております。

## &lt;南里&gt;

どうも、ありがとうございます。古賀さんと猪山さんの討議の中が、今の話で、少しつながりがはつきりしてきたようです。

猪山さんが言われた「ふたりぼっち」という問題に対して、さっき「一緒に」という言葉もいわれました。そして、「生かし合う人間関係」と、これは垣間見えたということなんですけれども、関係性ということを基盤にしながら「暮らし」では、関係性を基盤にして、それをどうしていくのかというそのことが、つながってくるんだということですね。

子どもの活力ということでは、活力を付けていくってことは、大人が、親子が変わることで、いわゆる暮らしの伝承の中で、それをどのように発展させていくのか。捉えかたの違いはあっても新しい意味での大人の関係性を非常に強調していこうということをおっしゃいました。

さて、もう一つ生活体験学習の中身の問題で「やらせ」ということがあるんですね。サバイバル体験とか、いろんな場所でそこに突っ込んで、それぞれがそこでできるんだという気持ちにさせる、そういう問題もあります。

それからもう一つは文化伝統主義的なところへのチャレンジですが、これは森山さんのところでまだ決着ついておりませんが、メディアや商業主義と本当に人間的な子どもの野生的な部分をどのように、ひっぱりだしていくのか、生きようとしているその中身につながってくる。この複合型阻害の中でも特に「野生の精神」というものをどうするかというそこを少し、生活体験の中身と結び付けて、どう考えるかということ、ちょっと、補足して下さい。

## &lt;森山&gt;

私どもはですね、文部省から科学研究費を補助してもらって、中国の子どもと日本の子どもの比較研究を

やっているんですね。そのなかでも、私一番胸が痛むのは、親と子のコミュニケーションとか子どもの教師とのコミュニケーションの面で、お互いの関係がなくなってきた。子どもの方は「話していない」というふうに答えているのに、親の方は「話している」と思っている。

このへんのずれが中国に比べて、日本の子どもの方が非常に多いし、小学生から中学生にしたがって多くなる。1980年代に言われた孤立化する子どもたちが、90年代では、孤立化し自信喪失してしまっている子ども、親、教師—これがでているのではないだろうか、私は思っているんです。

ただ、私がまだ信じたいのは、子どもには野性的なものがある。で、これは、商業主義がそれを絡み取っているとは、あまり、とらないのです。この辺、南里先生と議論しないといけないところでしょうが。とにかく消費社会の中でそういったところに、マスコミ、マスメディアがどんどんでてくるんです。その中で、子どもたちの持っている野性がメディアの中で、どんどん冒険するんです。彼らはそこで野性を発揮している。だから、メディアの中の商業主義といわず、私は、メディアそのもののマイナス面というんです。

今から情報化社会ですから、必ず情報化していきます。その情報化社会の中にある、どんどん取られてしまっている野性を現実の中に取り戻してやらなきゃいけない。それが、実は生活体験学習であるし、生活体験学習の工夫の中で、でてきているものなんです。つまり、具体的に、ポケモン遊びということでパソコンなどをやる。それをですね、団地内の中なり、自然の中なりでやればいい。具体的にですね。そういう遊びをどんどん作っていくということは、私は、生活の取り戻しであると思います。

実は私は今年つくっている野菜のゴーヤ(にがうり)を持ってきました。たぶん5年前だと「うわー、大学の教師がこんなものもってきて、作ってる」とか「なんだ、農業野菜づくりか」といわれるかもしれない。「森山といたら森と山じゃないか、田舎だ」という発想で。ところが、今や、こういう形で、生活の豊かさというものが必要になってくるのです。さっき、カツシちゃんカレーといってもみなさんわからなかったと思います。30数種類のカツシちゃんカレーがあ

るというの。じつはこれ、猪山勝利という名前なので、猪山さんが作る30数種類のカレー、それをみんなに分け与える、関係を豊かにしていく。

「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」から、今から21世紀は「関係の豊かさ」です。これが、ネットワークキングであるし、子ども育ちというのは、関係がお互い豊かになっていくことです。子どもと子どもの関係、子どもと自然の関係、子どもと親の関係、こういったものが豊かになっていく方向を私たちが、取り戻さなければならないんじゃないか、ということでございます。

<南里>

私が商業主義やメディアとか、いった問題も、今のことでよくわかりました。そういった野性性という問題は、自然の中で、大人が自然性をどうもどうやって喪失していくのかということと、しかし、もう一方では、メディアのなかで捉えている野性性というものでもう一回それを、取り戻していくか、ということですか。

その生活体験の中身では、今いくつかの捉えかたが出てきたわけですが、正平さん、庄内生活体験学校において、今までの生活体験の中での捉え方。生活体験学校の意義を通して、特に発言されたいことをよろしくお願いします。

<正平>

生活体験学校のプログラムというのは、子どもの育ちの歪みを一定のプログラムをくぐらせることを通して修正していこうとする動機づけをする、そういう試みをやってきたわけです。今までの意見にあったように、子ども達の姿を見れば、もう、当然のことに大人の暮らしの歪みが、存在していて、その影響下にある子どもの暮らしが歪んできていることは改めて言うまでもないことです。あらゆる子どもの問題は子どもにだけ何かが起こって現れることはないと言ってもいいぐらいに少ないわけで、先に何らかの大人の問題があるからこそ現れてきているわけです。子どもの問題は大人の問題であり、大人の問題はやがて子どもの問題として現れてきているわけです。

その意味では、生活体験学校の運営だって子どもの

ことを中心に話してはいますが、何も子どものために限って存在しているわけではないのが生活体験学校の実像です。これまでも子どもに多くの影響を与えてきたのも事実ですが、庄内町の大人にも多くの影響を与えてきた生活体験学校だったのです。ここに集まってくる大人の人間関係というものが土台にあって今日まで運営できてきたわけです。

つまり、生活圏域を共にする身近な場所に位置している生活体験学校だからこそ、結び育てることができた人間関係の蓄積が大きな力になり、熱源になっているといえるでしょう。

高齢者と子どもが長い時間を共に過ごす、一緒に物を作り出していく、それもゆっくりとしたリズムで共に考えながら、共に励まし合いながら、そういう場として機能してきたのです。

また、施設そのものではなくても、江浦小学校のように学校から呼びかけて保護者がこれに応える、そういう信頼関係が形に現われた通学合宿は、庄内町に勝るとも劣らぬ人間関係の蓄積を感じるわけです。それぞれの地域で、大人と子どもの人間関係の回復、再構築を、大人同士の人間関係の回復、再構築を具体的に積み上げていかないと、それぞれの地域の豊かさというものが出てこないんですよ。

大人同士の人間関係の実像、これを生活体験学校の風景で紹介するとこうなります。2年がかりで育てたアスパラガスの畑を、別の大人は、「草がよう生えとるなあ」とトラクターをグルグル走らせてチャラにしまう。小屋づくりでは、「昨日、俺がせっかく取りつけた風抜きを誰かが外してしもうとる」と愚痴を言ってるかと思えば、翌日は別のボランティアが、「あのおやじ、俺がせっかく外しとった風抜きを釘でガンガン打ち付けてコンクリまで張って作りあげとる」と悔やむといった具合です。いずれも、何の打ち合わせもない、激しい大人同志の食い違い。それでもケンカにもならず、今日までやってこれたのは、決して安定的でもないし、それでいて敵対的でもない大人同士のゆるやかで「遊び」のある人間関係が存在したからでしょう。

子どもがいるからこそ、枕をならべて寝ること等決してなかった大人同士が、「当直」という場面で人間関係を結ぶことができるのです。子どもが作ってくれた

と言ってもいい、豊かで、同時に見苦しくもある、大人の間人間関係を土台にして成り立っているのが生活体験学校です。

<南里>

どうもありがとうございました。要するに、「いろんな大人がいて決して、大人の言ういろんな葛藤の中に、大人と子どもが励ましあい。共に考え、共に励まし過ぎてきた。そして、その中に、子どもたちが息づいている」ということですね。

登壇者の方に、各々2〜3分しか時間がないんですがもう一言ずつ。

どちらかというと生活体験というのはいいことを、いい形で体験させることをマニュアル化させてどうするか、ということがある。そして、決して悪いことは教えない。そういう形で受け取って、出来るだけ出来る人たちが協力して過ごしてしまいがちなんですね。ですが、先ほど正平さんの話の中でも、学校がどう汗をかくのか、もう一つは、社会教育は、どう汗を掻くのか。親がどう汗をかくのか。ということからはいつてようやくここにきたんですが、また、そういう生活体験じゃいけないということが議論の中にある。

昔はみんなが葛藤して、子どもはちゃんと生活して、労働や暮らしの文化を育てていく、それが70年代にひっくり返されて、商業文化に変わり子どもたちがどんどん育ちから保護のかわっていき、という形になっていって、逆に必死に取り戻そうというかたちになってきたときに、悪いことは取り除いていくなかで、無菌状態をつくりだしていくという形になりつつあるんじゃないか、と思われまます。

最後に、学社連携・融合を作っていくために、それぞれ何か、ひとつの提案・提言を。古賀さんの方からお願いします。

<古賀>

学社連携・融合を作るときに一番大切なことは、学校に問題があるという以上に学校の教職員に暮らしがないということだと思います。暮らしを持たない教職員に子どもや、地域の人たちとの接点はありません。そういった意味で本当に自分たちは生きているのか、何を目的として生きているのか、まさに人間の「生」

の基本のところが問われています。そして、生活の共有、暮らしの共有がベースになって初めて、その次に新しい共同の価値が見出されたり、ボランティアの意味が見つかったりするだろうと思います。

そういった意味でくだいようですけれども、生きる力を共有化し、お互いに思いを語りあえるような、ネットワークの創造が基盤にあって初めて「総合的な学習の時間」の意義もあるでしょう。学校におけるボランティアの活動もあると思います。そういった関係の豊かさをどう作っていくかという課題と、その一つ手前、関係を作れない現実をどうクリアしていくのか、そのあたりが大切だと思います。

もう一つ、野生という言葉がでてきておりますけれども、おそらく皆さんも、野生という言葉が聞かれますと、社会問題といいたましようか、子どもたちが人を殺すようなああいうエネルギーの暴発の様子を思いうかべるんじゃないでしょうか。そういうエネルギーの出し方でない、野生というそのひとが固有に持っている本物のからだの中からふつふつと出てくる、関係を作り出すエネルギー、これをどうやって創造していくのが、学社連携・融合の根っこにある課題だと思います。

#### <猪山>

私は、私をふくめてですけれども、暮らしをもう一步創造するというのを、このさいに、連携・融合という前に、一緒にですね、学習をちょっとやめて、ということになりますけれども。学校と地域が町内の環境なら環境をどう作るかということ、もっと教師と地域の人たちが一緒になってイベントをもう、やめたほうがいいじゃないかとおもいますけれども。日本の運動会的にばーっと盛り上がり後は、何も残らない、そういうじゃなくて。本気で地域の課題をですね、一緒に作る、その中で働きもあるし、また、新たな学習もあるでしょう。

子どももやらされるんじゃないで、一緒に作る。教師はですね、本気でですね、自分の地域をどうするかというので、やれる教師は私を含めて5%もいないんですよ。自分が勤務している学校でも「あなたは環境をどのように作るのですか？」というふうにした時に、一般的な教科書を教えることはできるけど、具体

的なことはできるだろうか。自分があるかどうかも含めてですね。私もできるじゃなくて、私も長崎のある地域を学生とある地域の人と含めてやろうとしているんですけども。最初からもうほんとに勉強することばかりなんです。一緒にですね。

学ぼうとかちょっとイベントをつくるんじゃないで、やりながら作る方がいいと思うんで、是非子どもも一緒に、教師も子どもも地域の人と一緒にってという仕組みを作った方がいいんじゃないかと、問題提起に代えさせていただきます。

#### <森山>

じゃあ、だんだんクーリングオフしないといけないですね。落ち着いてということですが。私は、キーワードのひとつを「ネットワーキング」と、学社連携・融合に関してはいいました。そのほか、私は、「野性」とか「関係の豊かさ」とか「発想の転換」を含めていつてきました。

もうひとつですね。自己肯定感といいたまいますか、自尊心とも訳されますが「self-esteem」。学社連携・融合が中身としてやっていくには、ネットワーキングに加えて「野性」「関係の豊かさ」とかあるんですけど、自分自身を肯定する感情、自分を大切にするとこが他者肯定にもつながるとも思うんです。愛と癒しですよ。愛というのは、『新約聖書』のヨハネによる福音書、パイサイ人への手紙の中にもありますが、とにかく、愛は、妬まない。愛は全てを許す。そういう点で私は、孤立し、自信喪失の中でなにができてきているかという、妬みがでてきてるんです。そして、うらみ、つらみね。そういう関係をやはり、<癒し>ということと<愛>で反転していく。

これは、自分自身が生きている意味もあるんだ。認めてくれる人がいるんだというこういった、「self-esteem」を大人がとりもどし、子どもが取り戻し、教師が取り戻すことだと思うんです。「self-esteem」が確立できるよういろいろな学習 learning 方法はあります。いろいろな学習プログラムがあります。端的に田川でやっているのは、「人の子ほめしか運動」です。まず、近隣、まちの人間の子どもをほめて、そして、しかろう。とにかく、ほめてからしかろうという活動です。

それから、「田川いいとこみつけ」、ふるさとのいいところを見つけよう。あんたのいいところを見つけよう。これが、「self-esteem」につながっていくんです。これをお互いの関係の中で取り戻す中で、具体的な生活体験を共有する中でことばじゃなく生活体験学習ができてくる。このことによって、私は学社連携・融合の中身が出来てくると思います。

#### <正平>

ここにお並びの学者の先生方の豊かな知識、博学な方々ばかりでしょ。私みたいな者が、長い時間おつきあいする苦勞、お察しいただけますか。もうずいぶん前からのおつきあいなんですから。頭の毛が抜けたうちの何本かは、この先生方のせいじゃないかなと思うくらいです。

さて、ほめて認めるという議論がありましたが、生活体験学校の場面では一人の人間がほめたり叱ったりは、役割上やりにくいんです。ですから、私は、子どもを厳しく叱る。私が、現在はもう、子どもの前にたちませんが、今はほんとに厳しく叱るのは九野坂君一人でいいですよ。私は子どもの前にたつときは私が叱る。あんまり、やたらにほめたりはしません。なぜかというと、みんな、ほめたくって優しい人間ばかりが集まっているから、ほめちらかしてほめちらかして、どっこもネジがゆるんでしまう。私は、もう、ひたすら叱る。許さない。そういうことでいいのかと言い続ける。それが私の役割。

生活体験学校でやってることは何のためにやっているのか、何がねらいなのかと言われると、子どもの生活リズムを正常なものにして、自分の役割をきっちり果たせる、十分に働くことができる子どもになって欲しいという動機づけをしているわけです。ですから、そういうメッセージを親達に送れなきゃ、受け取ってもらえるメッセージを出せなきゃ、いくら通学合宿をやったってですね、本当のねらいは達成できないんですよ。

親たちに受取ってもらえるようなメッセージをどうやって作り出して、受け止めてもらうか。そのためには、すくなくとも、学校と社会教育は、共通理解をしてメッセージを送らなければいけない。さらには、どんな内容のメッセージでも、ワンチャンネルでは届か

ない。最低でも2チャンネル、できれば3チャンネルかけてメッセージを届けて初めて伝わるんです。

生活体験学校から、逆立ちしてメッセージを伝えたい、伝えたいと言ったって、それだけじゃ届かない。親達へのメッセージが受取ってもらえるような仕方、やり方、それがこれからの大きな課題です。

#### <南里>

どうもありがとうございました。具体的な方法論ということも含めてお話してきましたが、おわりに親に基本的なメッセージをどうやって伝えたらいいのか一つの一方的ななぐれではなくって2チャンネル、3チャンネル往復があります。リアクションがあります。それこそ共生社会における各々の生き方や自立さらには共同を大切にしていくことが大切です。最後に横山先生にこれまでの討議をふまえてまとめをお願いします。

#### <横山>

数日前、経済的に進んでいる先進8カ国の教育相会議が開かれたことが新聞に出ました。その中で先進と言われている国は、共通して子どもたちが荒れているということが報道されていました。

実は、私は、この生活体験に関わって、もう4、5年くらいになりますか、シルクロードの子どもたち、すなわち新疆ウイグルやトルコの子どもたちの生活をずっと調べております。それらの子どもたちは、先進国と違って非常に生き生きとしております。学校が大好きです。目が輝いています。生活レベルはどちらも日本よりはるかに低い。トルコでは60人学級のところもあります。先生の教え方もあまり上手ではありません。ですが、子どもたちは学校が大好きなんです。トルコのアンカラでは児童精神医学の専門家の先生方にもお会いしたんですが、日本で起こっているようなことについては「想像ができない。」と言っておられました。

ところで、今日のテーマは生活体験ですが日本の子どもたちのそれは今や大きく欠けています。これに対してウイグルやトルコの子どもたちを見てますと、とにかく体験が豊かです。例えば人間関係です。おじいちゃん、おばあちゃん、そして、小さい子どもたち、

遊びを通して、生活を通して、相互に関わりがあるんですね。本当に人間関係がどの世代においても豊かなんです。

それから、働く体験があります。家では、ちょっとしたお手伝いももう当たり前です。親の仕事を手伝っている子もいます。トルコの町で会ったある小学校5年生の男の子は公衆トイレの番をやっていました。楽しそうにしていましたが、いろいろきいてみたら朝早くから結構夜遅くまで働いているのです。どうして働いているのか尋ねたら、お母さんとお父さんと自分の金のプレスレットを買いたいんだと言ってました。アクセサリーが欲しいのじゃないんですよ。インフレで貯金が目減りする国ですから、貯金のかわりなんですね。トイレの掃除もするんだろうかと聞いたところ、「うん、トイレの掃除も上手だよ」と笑って言ってました。子どもたちは生き生きとやっているわけですね。そういう姿があちこちで見られます。

日本では働く体験がないと正平さんがおっしゃっていたけれど、本当にそうだと思います。自分の生活を自分でなんとかしようとする体験があって子どもたちは育っていくわけです。

この経済的に、豊かな社会のなかで、明らかに言えることは、子どもが生きる過程で、当然しなければいけない、生活体験が欠けてしまっているということです。このあたりを私たちは真剣に、見直してみる必要があるのではないのでしょうか。豊かになることは、少しも、悪いことではありません。便利なことは悪くないんだけど、子どもは、1000年や2000年で、その行動とか、心理が変わるわけではないのです。どんなに新幹線が速く走ろうとも、やっぱり動物としての人間の子どもの発達メカニズムは同じなんですね。彼らの可能性をいい方向に伸ばしていく為には時期・時期の体験が必用です。とは言っても全ての体験をさせなければ、というふうに考える必要はないんじゃないでしょうか。基本的な生活に関わる体験、人間関係に関する体験、或いは、挫折・欠乏に対する体験とか、自己決定に関する体験とか、本当に必要な体験に重点を置くべきでしょう。また、それらの体験はばらばらにではなく、一つのまとまった活動の中でさせていくことが大切だと思います。

例えば、福岡県立少年自然の家がかつて数年にわ

たって取り組んだ「チャレンジ・キャンプ」という事業があります。これは、自主性や社会性に欠ける子どもたちにいわゆるサバイバル的な体験をさせ、心の逞しい子を育てようとする試みです。このキャンプでは大人はあまり子どもに関わらず、必要最低限のことだけ教え、子どもたちが自分たちでキャンプ生活を楽しくできるようにしかけました。お腹がすいたら当然自分たちで竈をつくり、助け合って食事をつくらなければなりません。しかし、日頃からあまり仲間と関係をもたず、コミュニケーションをしたことのない子どもたちはほっとくと何もしようとしません。こんな時、ふつうならつい見かねて大人が声をかけたり手を出してしまうでしょう。このキャンプではそこが違っていました。子どもが空腹に耐えかねて大人に竈の作り方やご飯の炊き方を教えてくれるよう求めて来るまでほっとくのです。お腹のすいた子どもたちはついには「にいちゃん、竈の作り方教えて!」と手助けを求められるようになってきます。ここには、自発的なコミュニケーション体験があるのです。

お腹のすいた子どもたちのためにボランティアの学生スタッフが優しく、ご飯を作ってやるのは簡単です。でも、そうなるにせよ、キャンプをしても仲間助け合ったり、工夫したり、教えるを乞うためにコミュニケーションしたり、空腹を我慢したりする体験ができなくなってしまう。

このように考えるとおわかりのように、一つの活動の中にもいろんな体験が含まれているのです。したがって、大事なことはあれもこれも個別的に体験させなくても、子どもに欠けている体験を、関わる大人が発想をちょっと変えるだけでできる面があるのだということです。そうした体験の場をこれからは少し意図的に作っていくことが望まれるのだと思います。また、その体験が子どもの発達にとって真に意味のあるものとなるためには、関わる大人たちが子どもとどのように関わるべきか、その方法をよく理解していることが大切だと思います。絶海の孤島に連れて行ってキャンプしてありあまる食料や便利な道具を用意し、大人が何でもしてやったのでは、場を買えた過保護な家庭生活と何ら変わらないのです。今後この学会ではこうしたことをより深く議論することが必要だと思います。

<南里>

どうもありがとうございました。生活体験学習の推進にあたって私たちがしなければならないことは色々あるようですね。

さて、具体的に何を、どうすべきか、その方法などについてさらに論議を深めたいところですが、残念ながらもう時間がありません。また、まとめもできませ

んがお聞きになられた各シンポジストの提言を、それぞれの立場で検討していただき、役立てていただければ大変幸いです。シンポジストの皆さん、フロアの皆さん今日は熱心なご討議、本当にありがとうございました。

(おわり)

(記録：福岡教育大学大学院 安田 ふみ)